

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

# スパイラルデット

*Spiral Debt*

私立探偵アリーの淫靡な日常

小説 竹内けん

挿絵 松沢 慧

第一章	女に向かない職業	006
第二章	その女、狂暴につき	030
第三章	女狐、策に溺れる	076
第四章	女探偵と濡れ事師	114
第五章	雲海に巣食う女海賊	152
第六章	アマゾネスたちの宇宙	191

## 登場人物紹介

Characters



### アリー・ムーンヒル

私立探偵。「紅の戦乙女」と異名を取った退役少佐。非常にカリスマ性のある美人で、退官したのちも軍に彼女の信奉者は多い。

### ダスティ・ギレネフ

ノクターン商会審査部融資監理室。ひらたく言えば借金取り。

### シャロン・クリフォード

宇宙警察の警視。「雪女」と陰口を叩かれる知的な美女。入官した年には、宇宙警察の広告塔を務めた経験もある。

### マリーン

ノクターン商会の女社長。ただし、その会社が海賊団ノクターンの隠れ蓑であり、彼女が「銀流星のマリーン」と呼ばれる女海賊であることは、半ば公然の秘密となっている。

### ヤコブ

海賊団「毒の牙」の頭目。

「ああ……お願い、脱がさないで……」

無駄であることはアリーとて充分に承知しているのだが、もう濡れてしまっていることを自覚している恥部を平気でさらせるほど、開き直れているわけではない。

ダステイはレオタードは脱がさず、器用にヒモパンだけを脱がしてしまった。

股間のずれを直されたレオタードに、小さなショーツをひとつ取られたことによって、愛液の染みがクッキリと浮かび上がった。

彼は手にした濡れショーツをアリーの頬に擦りつけながら囁いた。

「すげえ、ヌレヌレのビショビショだ。愛液が滴るほどの濡れ方だ。まるでションペンを漏らしたあとのようなだけ」

「ウソよ……、そんなこと……」

だが、彼女の抗弁は虚しかった。自分でもそのショーツが凄まじいことになっているのはわかる。逆に目に見えないことで、卑猥な妄想は広がってしまう。

いきなり、レオタードの股布の脇から指を入れられた。視界は利かなくとも、陰唇に入られた指が、クチャクチャと粘着質な音を立てて耳朶を打ってくる。

「聞こえるだろ、ここもすげえ洪水だ」

「あはっ、あはっ……」

感じていることを隠しきれず、声が漏れる。



「クククッ、どうやらマゾの素質があるようだな」

「……そんなこと、……そんなことないわよ」

「いや、マゾだよ。マゾでなきや、目隠しをされて足を舐められただけでこんなに濡れるはずがないさ」

言葉で散々に煽ってからダスティは、痛々しいまでに勃起してしまっている乳首を不意に摘むと、グイッと引っ張り上げた。

「あ、ひいー……ああっ……」

アリーは身を反らし、涎を吹きながら悶絶した。充血して痼り勃っている乳首には、少々乱暴なことをされても、女にとって快感なのである。

股間の染みがいつそう広がって、レオタードでは吸いきれず、太腿に愛液があふれ出してしまった。そして長い美脚がV字になるように身体を折りたたまれる。

普通の女ならこんな格好にされては、羞恥うんぬんよりも先に肉体的な苦痛に悲鳴を上げてしまうが、アリーに関するかぎりその心配はなかった。

「ちよっと持ってな」

指示に逆らえないアリーは、屈辱の極みの格好で自分の両脚を抱えたまま、女の大事な部分をすべてさらした。いわゆるマンガリ返し状態である。

レオタードの股布を脇にどかすと、内部では大量の愛液が左右に糸を引き、柔肉がヒク

ヒクと震えている。全体にあふれているのは透明な液体だったが、膣口周辺の細やかな髷には、白っぽく濁った粘液が淫らにまとわりついていた。

陰唇はもちろん、アナルまで丸見えの、まるで赤ん坊のオシメを代えるかのごとき姿勢である。

目隠しをされた女は、どんなに恥知らずな格好でも、大概は抵抗をなくしてしまう。それでいて、いま、自分がどのような恥知らずな格好をさせられているかわからない不安からビリビリと性感を高めていってしまう。常に、次はどこをどのような方法で責められるかと、期待と不安に震えているのだ。

ダスティはしばし陰毛の一本一本を愛撫しながら、女の秘部を観察した。

つい最近まで、アリーのクリトリスは完全な包茎であったのだが、ダスティによって剥けるように癖をつけられてしまつて、いまでは興奮状態に入り勃起すると、そのルビーが頭を覗かせるようになっていた。

彼は大陰唇をグイッと左右へと押し広げ、ピンクの媚粘膜を、クリトリスの果てまでズル剥きにしてしまつてから、そのすべてを入念に舐め回し、ついには尿道口を小突き、舌先で抉るようなまねをしてくる。

「今回の愛液は、一段と塩味が効いていしょっぱいぜ」

ジュルジュルとわざと卑猥な水音を立てて愛液を吸っている。この男の前戯は、ねちっ

こくて入念である。アリーをどうしようもなく高めるのが趣味なのだ。

熱いマグマのあふれる肉窟に、人差し指と中指の二本を突き立て、グチャグチャにかき混ぜながら、剥き出しの陰核を舌先で舐る。

「はあ、あ、あん、うん……」

その濡れ方はハンパではなく、陰唇はもとよりアナルのほうまであふれる蜜によってドロドロになってしまっている。

不意に、熱湯のあふれる洞窟に突き立てられていた指が引き抜かれ、入口付近を軽く左右に擦られた。

「あ……、そ……、そこは！」

驚愕の声を発したアリーの裸身は、いままでとは比べ物にならない激しい痙攣に襲われた。指先が、Gスポットを捕らえていたのだ。

「ふああ……！」

口唇から涎を垂らしながら、男の指先は女の最大の急所が隠れている上脛をかくようにして前後運動する。ビクンビクンビクン……という痙攣とともに切なげに腰を振るっている彼女の耳元で嘲笑が響く。

「腰が動いているぜ」

「あ……やめて……ああっ……」

ビュビュビュッと、ついには潮が吹き出してしまった。その勢いは凄まじく、ダステイの顔にまで届いてサンングラスを汚すほどだった。

「あふあ」

「自らが潮を吹くさまは目に見えなくとも、尿道から液体が噴出したことはわかる。あまりの羞恥に体が震える。」

「やれやれ、本当に漏らしたな。これからは淫乱マゾ探偵アリーと名乗るんだな」

「い、いやっ……」

恥辱の言葉を浴びせられて、大理石の肌が紅の頭髪に負けぬほどに燃え上がり、手足の指先や、髪や産毛の先までも敏感になって反応している。

Gスポットでイってしまったアリーは、淫らな気分になつて陶然となつていた。

ダステイは悠然とサンングラスを外してハンカチで女の雫を拭くと、再びかけ直す。

それから潤沢にあふれている愛液を中指ですくい上げて、ハアハアと喘いでいる赤い唇に添えて塗りつけた。指先からは透明な液が滴り落ち、キラキラと部屋の明かりを反射して輝いていた。

「しゃぶりな」

悔しげに眉を寄せたアリーだったが、素直に自分の愛液のついた指を口唇に啜えて、指フェラを始めた。

ダスティによつて教え込まれたフェラチオの技術を指相手に披露する。

なまめかしい舌が指に絡みつき、チューチューとしゃぶり上げた。ダスティが指を引くと、絡みついていた唾液に濡れ光るピンク色の舌も一緒に外界へと姿を現す。なかなか官能的な光景である。

もはや男に貫かれる歓びを知ってしまった女であれば、ここまで高められてはすぐにも貫かれないだろうが、アリーの性格ではそのような懇願をできるはずもなく、虚しく指を吸るしかない。

「こんなに淫乱な女初めて見たぜ」

「う、ん……やめて……。馬鹿にしないで……」

半狂乱になって叫んでしまっていたが、「こんなの初めてだ」という台詞は、スケコマシの十八番である。もっとも、現在のアリーの姿が、まれに見る痴態であることはなんぴとも否定できないところである。

赤ん坊のおしゃぶりのように指をしゃぶらせているダスティは、もう一方の腕でレオタードが伸びきつて裂けてしまうのではないかと思えるほどに、その股布をグイッと横によけた。

もう早く入れて、と懇願しているような女唇に、口唇から引き抜いたばかりの指をあてがったダスティは、髻を髑るようにして下ろしていき、会陰部をマッサージし、さらには

アナルに添えてきた。

「あっ！ なにを」

「なに、オマ○コの開発はだいぶ終わったから、今度は尻の穴を開発してやろうと思ってね」

「や、やめて、お尻はやめて」

「そう嫌がることもないさ。初めは辛くても、だんだんによくなるって、オマ○コもそうだったろ」

アリーの唾液と愛液によって濡れそぼった指先が、軽く菊座に突き立てられる。

「や、やめてーっ」

必死の懇願を聞いたのか、ダステイはいったん指を離した。

「そんなにイヤだったらやめるぜ。ただしそのときには、契約は不履行ってことで、いますぐこの船を差し押さえるだけのことだ」

「くうのっ……、この卑怯者……」

お決まりの脅しを受けた彼女は歯噛みしながらも、やむをえず暴れるのをやめた。その殊勝な姿に、ダステイはほくそえむ。

女を墮とすためには段階を踏むのが一番いい。最初の一步を踏み出したが最後、その一步を無駄にしないためにつきつきと歩を進めるしかない。そして、気がついたときには、

自他ともに認める牝奴隷のできあがりというわけだ。

「じゃ、息を吐いて、肛門を緩めな」

観念したアリーは、赤ん坊のオシメを代えるような無様な姿勢で、言われるままに息を吐き出し、固く締めていたアナルから力を抜いていく。

肛門から力が抜けたところで、尻たぶが思いきり開かれ、剥き出しとなった菊華に接吻されて入念に舌を這わせられた。

「うっ、くっ、あっ……」

アナルを舐め弄られるという感覚は、単に性的に虐待されているという恥辱だけではなく、人間としての尊厳を損なわれている気分になる。

尻の穴が綺麗だと胸を張れる女はそういないだろう。風呂好きなおアリーとしては尻の穴だって綺麗に洗浄しているつもりだが、舐められても羞恥を覚えないほどに自信があるわけがない。

薄紅色の菊華が、愛液と唾液によってドロドロになり、いいかげん柔らかくなつたところを見透かして指先が添えられる。その意図を察した彼女は震え上がった。

「ゆ、指は入れないでっ」

「ダメだね。愛奴の穴という穴は、ものを突き入れられる宿命にあるのさ」  
窄まったアナルに、アリー自身の唾液で濡れた指が触れ、押し込まれた。

中指がゆっくりと挿入されていき、爪が、第一関節が、第二関節が、ついには根本までがズッポリと入ってしまった。

本来、排泄行為は行っても、異物の侵入は許さない穴を串刺しにされた彼女の全身から、運動による熱い汗とは違った冷たい汗が吹き出した。

「あ、や、やめて、ひい、ひい、動かさないで……」

肛門に入り込んだ指は、その穴を拡張するようにグネグネと動き回り、さらにはゆっくりと引き抜かれ始める。

「ひいーッ、ダメー……ッ」

思わずアリーは絶叫してしまった。

肛門に指を挿入される体験は、不愉快であつてもまだ我慢できるものだった。しかし、拔去される不快感は想像を絶した。

指がニユルニユルと出ていく感覚は、大便がゆっくり排泄されるのと同じ感覚である。それが自分の意図しない状態で起きるのだ。その心理的な不安たるや凄まじいものがある。人間としての本能に従い、漏らすまいと必死に肛門を締めるのだが、ダスティの指は止まらず抜けていこうとする。だけではなく、少し関節を曲げてひっかかりを作るようなまねまでしている。

そして、ようやく終わりかと思えば、再び押し込んできて、ゆっくりと引き抜く。その

抜き差し運動の繰り返しである。

「どうだ、気持ちよくなってきたろ、尻の穴がさ」

「そ、そんな、いいわけないでしょ、ああ……」

強気な態度を崩すまいと必死になるが、アナルを掘削されている状態では語尾が情けなく震えてしまう。無様なマンガリ返し状態で、菊門に指を入れられているアリーの陰唇から、白っぽい愛蜜がトクトクとあふれていた。

「くくくつ、強情だな。じゃ、これでどうだ」

ダスティはさらに、ヌレヌレのヴァギナに親指をぶち込むと、アナルに入っている指との間の肉壁を揉み上げた。

「ひい、ひい、ひえ……」

アリーは言葉にならない悲鳴を上げてのたうった。

「ケツを振って悶えるなんて、まるで動物の牝だな」

そんな屈辱的な台詞を浴びせられても、現在の彼女には愛撫の一環のようであった。ふたつの穴をほじくられ、口唇から唾液を吹きながら痙攣するしかない。

「よし、そろそろいいだろう」

指を引き抜くと同時に腰の野太い逸物をしごき始めた彼は、アリーのヴァギナを串刺しにした。

「はぁー、はぁ、はぁ、はぁ、もう……」

ようやく挿入されたせいか歓喜の声を漏らしてしまう。しかし、ダスティのほうは挿入したら挿入したで、なかなか動き出さない。

「どうかしたか？」

入れられたまま放って置かれるというのは女には我慢ならない事態である。まして、こんなに高められた女にとっては拷問も同じだ。

こういった状況での女の辛さと切なさを彼は充分に承知しているはずだった。それなのにわざとその状態で留め置くということは、獲物を焦らそうとしているのは確実である。

彼の嘲笑を含んだ声色から、感性の鋭いアリーは男が意図するところを悟ったが、あえて耐える。

だが、結局は耐えきれず彼女は本能のままに腰を使おうとした。しかし、ダスティに押さえ込まれたこの姿勢では、それすらも叶わない。

男は、同じ絶世の美人を抱くにしても、愛情で抱くときと、金銭が絡んで抱くときでは、まったく違う抱き方になるとはよくいわれることだ。

現在、彼がアリーを抱くのは金銭絡みであり、それも徹底したビジネスであったから、その調教に容赦というものがなかった。

「あぁ……っ、お願いっ、焦らさないでっ、もっと思いっきり動いてッ」

ついに、懇願の言葉を発してしまった彼女を、ダステイは身体を半回転させて、自分が下、女を上という状況に変えた。

「自分で動きな」

いきなり騎乗位にされて戸惑っているアリーの尻肉を、軽く叩いて促す。すると尻を叩かれた馬のように、彼女は夢中になって腰を使い快楽を貪った。猛り狂った牝馬のような荒腰である。恥毛が擦れ合い、間からあふれる愛液がクチュクチュと淫らな音を立てる。

「はあ、あん、あん、あん……」

男はアリーの手を取ると、弾んでいる乳房へと導いた。すると、性感に飢えた女は自分の乳房を大胆に揉みしだく。

胸を揉み、腰を振るって快楽を貪っている女の痴態を、ダステイは仰向けになって腕を頭に組んだ体勢で観察している。

「借金の形で無理やり犯されているというのに、なんて淫乱な女なんだ」

「あつあつあつ、い、言わないで、そんなこと言わないで……」

恥じ入る言葉とは裏腹に、淫らな踊りは激しくなる一方である。

「いかに淫乱か自分で確かめてみな」

その言葉とともに、不意に目隠しが解かれた。

アリーの目に入ったのは姿見である。着崩れたレオタードに身を包んだ女が、狂ったよ

うに腰を振り、胸を揉んでいる痴態が映し出されている。

「あつ、あつ、あん、あはあ、あんっ、あつ……」

(ウソでしょ、これがわたし……)

目をトロンと蕩けさせて、自ら乳房を揉みしだきながら結合部もあらわに、浅ましく腰を振ってしまったている女がそこにいた。

目隠しをされていたからわからなかった痴態を、姿見によって思いっきり直視させられることになった彼女の脳裏は、真っ白にショートした。

「イ、イヤァァァ」

自分の姿と対面した女は半狂乱になって悲鳴を上げたが、錯乱することすら許されない。腰が捕らえられ、ドスドスと突き上げられ始める。

「アァァァ! 当たる、当たるわ、やめて、そんな奥まで……」

声のトーンが一段と上がり、上擦った喘ぎ声の響くなか、互いの股間がぶつかり合う。

深々と突き入れられるたびに、クチュックチュックと淫らな湿った音がトレーニンググルーミングに鳴り響いた。せめて自分で乳房を揉むことはやめようとも思ったが、自制することはできなかった。

紺碧色の瞳は潤みきり、涙ぐんでさえいた。嬌声を張り上げる口唇からは唾液を吹き、あふれ出る愛液は陰囊から太腿までべっとりとなめらせている。

(こんなに……。わたしたたら、こんなに……。)

表情には被虐で陶醉する色が濃厚に浮かんでいる。勝気で負けん気の強いアリーの、本来の姿からはもつとも遠いものである。

同時に膣内の収縮と吸引が激しくなり、男根を奥に奥にと蠢かせた。

「う、いっちゃう！、ダメ、いっちゃう、いっちゃう……」

鏡に映る女がガクガクと全身を波打たせている。

彼女は、オルガスムスに達した女、自分自身の激しさを目の当たりにして、脳内が焼き切れるのを感じた。さらには、

「ヒッ！ 熱い、熱い、アアッ……！」

狭い柔肉の内部で、ビクビクとペニスが痙攣して、大量のザーメンを噴出させたのだ。アリーにとって、この内部に満ちるザーメンの温もりと、子宮を打ち据える激しさが駄目押しとなった。

ダスティは最後の一滴までを体内に放出してから、ようやく突き上げるのをやめた。

アリーは、逸物を決して逃さないようにキュッと締めたまま、男の上に倒れて失神してしまっていた。

※



シャロンを陵辱するさまを見たときから、尋常ではない生物だろうと予測はしていたが、これほどまでに想像を絶した化け物とは知らなかった。

「キヤーツ」

背後から婦警の悲鳴が上がった。

気密服に身を包んでいるアリーとは違い、婦警たちは剥き出しの裸体である。女の柔肌  
に、天井から雨垂れのような粘液が降り注ぎ、床から湧き出した水溜まりに足を掬めとら  
れたのだ。

アリーは振り向きざまに光線銃を放ち、その婦警を捕らえた触手を焼き切り助けたが、  
直後に別の婦警から悲鳴が上がる。

それはシャロンの持った光線銃が救い出した。アリーとシャロンの放つ二本のエネルギー  
ービームはつぎつぎと焼き切っていくが、湧き出し融合する粘液にきりが無い。

もちろん、婦警たちも並の女性とは違い、体術も充分に仕込まれているから、どうか  
逃げようと奮闘したが、やがてなす術もなくベタバタヌラヌラした生物に絡まれて動けな  
くなってしまい、まるで獣のように喘ぎ始めた。

「ああ、あー、あーっ」

ついには光線銃を持っていたシャロンまで捕まってしまった。

「ううっ、ごめんなさい、アリー。うっ、わたしたちこいつに責められたらダメなの」

シャロンは美しくも知的な容貌と、熟れきった魅力的な肉体を、羞恥、いや快感に紅潮させながら、自嘲の笑みを浮かべていた。

「ちよつと、あんたたち、なに諦めてるのよ」

「アリーも、いまにわかるわ、ああ……、凄いのこれ、子宮が、脳が痺れてしまうの」  
まったく無残な姿だった。

若く美しい婦警たち、まるで蜘蛛の巣に捕らわれた蝶々のように、通路に固定されて、悦楽の声を上げているのだ。

ドーン……。

ネガボジの表面にも、海賊船からの流れ弾が命中したようである。要塞が震動し、その衝撃で、この人工改造衛星の重力制御装置が壊れたらしい。

謎の生物にまさぐられていた女たちの裸体が、宙に浮かび、その乳房が、無重力ならでの完璧な形に整えられる。

重力に支配された世界では、決してありえない体位にされて女たちは犯される。体位が変われば同じ陵辱でも、また違った刺激となつて女たちの性感を蝕んだ。

ひとり狂つたように光線銃を乱射して奮戦していたアリーだったが、いつのまにか宇宙服に謎の粘液がみっちり絡みついてしまった。完璧な気密服であるのだから、外面に付着してもどうということはないとアリーはタカをくくつていたのだが、その生物は、じわ

じわと彼女の脚を侵食し始めた。侵食は足首から膝、膝から太腿へと進んでいく。

「ウ、ウソでしょ」

ヘルメットの奥で紺碧の瞳が見開かれ、動揺の波が生まれる。

足が止まったことで、天井からポタポタと降り注ぐ粘液が顔に付着し、視界を奪われたアリーは、やむをえずヘルメットを脱ぎ捨てた。

ここはネガポジの内部なので、空気は平常にあり、なによりも婦警たちが生きているのだから、宇宙服なしでも活動に支障はないものの、精神的な不安は拭えない。

宇宙で活動している者にとつての第二の皮膚というべき宇宙服の下で、なにか大きな寄生虫が這い回っているかのように、あちらこちらが盛り上がり動く。

こちらはヘルメットのように着脱自由という具合にはいかない。着用するときと同じように、専門の設備に入らないと脱衣できないのだ。

寄生虫が這い上ってくるかのような悪寒を感じ、せめてこれ以上上がってこないように手で押さえたが、まるで意味がない。水が流れるようにして駆け上がり、ついには女の生殖器が捕らえられた。

「ひいー……、なんなのこいつ、ああ……」

この謎の生物は、硬軟自在に変化するという非常に細かい芸もするらしく、生殖器全体をぴったりと覆い、襲のすみずみにまで侵入する。またクリトリスの包皮のなかにまで入っ

て、女の敏感な急所を粘液で包み、逆に膣洞にもぐり込んだと思っただら硬い物質になって膨らんだ。

こんな得体の知れない生物に、女のもっとも敏感で大事な部分を触れられて、そして、貫かれて、心情的には恐怖しかないはずなのに、人間の男の生殖器官では決してできない動きに悶えてしまった。

人肌の温もり、いや、男のペニスの温度、それも射精する直前の燃えるように熱い温度である。それがまるで、ピクンピクンピクンと勢いよく射精しているような、女にとってもっとも狂おしい快感を与えてくれる瞬間の脈動を永遠に繰り返しているのだ。

どんなにおぞましくても、体と心は別物である。こんな責め苦を受けた女がよがり狂わずにいられるはずがない。

「く、くぁーッ、こ、こんなものに……、こんなものに犯されるなんて……。きやあつ、あひい、ひっ……いひい」

アリーの声が完全に裏返る。

ダスティの性技が、いくら成熟したプロの技だったとはいえ、あくまでも人間の与える快楽であった。しかし、これは人間では決して与ええない快楽なのである。

気密服の内側に入り込んだ粘液が、執拗に女の性感帯を這いずり回る。やがて気密服の伸縮性が限界に達したのだろう、内側から布地が爆ぜた。そして、何ヶ所も、何ヶ所も、

あちこちが裂ける。その裂け目からも粘液が侵入してくる。

この生物は、女の急所をじつによく心得ているとみえて、その濡れた体で乳首を入念に弄んだ。乳首を人の口腔に含まれてしゃぶられている感覚。いや、体中が唾液と精液とペニスによつて嬲られているようだった。

おぞましいといえばこれほどおぞましい体験はなく、女に肉体的な悦楽を与えるだけならば、これにまさるものはないだろう。

それでも紺碧色の瞳は、この謎の生物を睨みつける。どんなに絶望的な状況でも、自分から諦めるということは決してない。最後の最後まで、自分のできる最善の道を探し、もがき、あがく。どんなに格好が悪くても、それがアリーの身上であり、生き方である。ダステイに自尊心をボロボロにされた経験のあととはいえ、それは変わらない。

しかし、この未知の生物の動きは、そんなアリーの矜持をも易々と呑みこむほどに凄絶であった。

「いかされてたまるもんですか、は、かはあぁー……ッ」

女にとつて、未知の生物に体を犯されて、いかされてしまうというのは、金で体の自由を奪われ犯されるのとはまた違った屈辱があることがわかった。

五十歩百歩には違いないが、金で犯されるときには、まだ自分の体にはそれだけの価値があるのだ、という自己陶醉という名の、逃避ができたのだが、いまはただわけのわから



ない、人間の男相手では決して味わえない、非人間的な快楽に悶えるしかない。

(これが、これが宇宙警察の密偵たちを行方不明にさせ、シャロンを捕らえ、スノーレディの面々を捕獲し、三流の海賊団がデカイ顔をしている秘密か)

理解できたが、理解できたからといって、現実がどう変わるわけでもない。

この謎の物体は、ヴァギナだけでは飽き足らず、女のありとあらゆる穴に侵入してくる。「う、うぐっ、ぐぐう……」

口内に入ってきたそれを、アリーは歯で噛み切ろうとしたが、独特の弾力があって不能だった。さらには、

(おっ、お尻にまで……！)

手足を固定されて動けない女探偵の尻の穴付近でむずむずと動いていたかと思ったら、そのまま触手を挿入してきたのである。

(や、やめて……、そこは感じすぎる)

ダスティによって拡張されてしまった肛門に触手がドクドクと入っていくごとに、理性が飛んでいく。

膣道と尻穴と口唇を塞がれてしまっているアリーだが、女にはもうひとつ穴があった。謎の生物は、そこにまで侵入してきた。すなわち尿道である。

形があつてなきがごとき生物は、細いすいどう隧道をかき分けて上がっていく。

「……うっぐっ」

まったくの未知の体験に、紺碧色の瞳が見開かれる。

尿道に異物が入り込んだとき、女はどうなってしまふのか。その答えはすぐに出た。

プシャアアア……。

強制失禁である。これは肉体の構造上、絶対に我慢できないのである。そして、探偵に  
凄まじい快感をもたらした。

※

宇宙の片隅にある太陽系、その片隅にある木星の、さらに片隅にあるノルバ宙域、その  
また片隅にある小さな小さな人工改造衛星都市ネガポジで、悠久の宇宙の歴史に思いを弛  
せれば、実にささやかな火遊びが行われていた。

マリーンの率いるノクターンの宇宙船五十隻に対して、ヤコブの率いる「毒の牙」は三  
十隻にも満たない。とはいえ、「毒の牙」は本拠地ネガポジでの闘いであつたから、補給  
線の心配はなかつた。

しかし、船の数の差は絶対的なうえ、奇襲を食らつて機先を制されたこともあつて「毒  
の牙」の不利は免れないはずだつた。というのに、ノクターンの動きは妙に鈍い。自ら奇  
襲を仕掛けてきた連中とは思えぬほど、攻撃に積極性というものが感じられないのである。  
やがて戦局に劇的な変化が起きた。アリーの従者こと小ゴルダス、サムエル少佐の手配

によって、ノルバ宙域の近くでたまたま軍事演習を行っていた宇宙軍が、海賊たちの武力抗争という連絡を受けて急遽駆けつけてきたのだ。

アリーは、報われぬ愛に身悶える青年士官サムエル少佐が、自分の指示どおりに動くことを少しも疑っていなかった。

昔から律儀な男で、自分の信頼を一度として裏切ったことはないからだ。それが自分に惚れていればこそ、と思いたらないのがアリーのアリーたる所以なのだが……。

それでも、動員された兵力は予定外であつたろう。

無限の宇宙に浮かぶ船の数は、駆逐艦十四隻、巡航艦八隻、高速艦三隻、空母一隻、さらに驚いたことには乗組員千名、大小六百門の大砲を備えた重戦艦まで一隻混じっていた。総乗組員一万名を越える大艦隊である。

アリーの提案は、巡航艦の五、六隻であつたが、それを上回ること十倍以上の戦力規模である。それは木星近辺に駐留している宇宙軍の実に一割にあたる。

このような事態になつたのは、サムエル少佐の手配した、公式な演習への命令伝達のほかに、「これはアリーからのお願いである」という非公式な噂が流されたからである。宇宙軍内にいたアリー信者と呼ばれる男と女がこぞって参加していたのだ。この私的な軍事ピクニックへの参加を、なぜか軍最高責任者である、宇宙連合艦隊司令長官大ゴルダスが黙認した。さらに木星管区司令官ボルーマン中将にいたっては、参加を積極的に煽つたと

いう側面もある。

アリーが、サムエル少佐に提案という名の命令をしてから、わずか一週間でこれだけの艦船が動いたのだ。もう一週間も余裕があったなら、さらに倍の艦船が動員されていたであろうことを、サムエル少佐あたりは疑わなかった。それほどまでにアリーの人気は宇宙軍のなかで絶大なのだ。

宇宙軍来襲の報告にいち早く気づいたのが、これがあることを知っていたノクターンだったことは当然である。

久々の実戦に手下たちと同じように血をたぎらせていたマリーンだが、その内心はすこぶる冷静であった。その冷静さがマリーンをこの業界で成功させた理由であろう。たいしてヤコブのほうは完全に猪突猛進になってしまっている。目先の敵を倒すことに夢中になって積極的な指示を出しまくっているのだ。その差がこのときに出た。

「よし、来たね」

興奮状態にあり、攻勢に出たくてうずうずしている手下たちを、そのカリスマ性で抑えてマリーンは艶やかに笑った。

「野郎ども引き上げだ。宇宙軍の来る方角とは反対の方角に逃げるよ。もたもたするなっ！」

いきなり退却を始めたノクターンの不可解な行動に、「毒の牙」たちは戸惑うも、敵が

引いたら条件反射で追撃したくなるのが、訓練されていない者、つまり海賊連中の特徴である。自分たちの奮闘が敵を退けたと勇んで猛追撃に出た。

その無防備に戦列を伸ばした背後から、宇宙軍が怒濤のように押し寄せてきたのである。ノクターンとは違い、宇宙軍の介入をまったく予測していなかった「毒の牙」の背筋には戦慄と驚愕が駆け抜けた。宇宙軍のまとまった戦力に急襲されて、対応できる海賊団などいるはずがない。

宇宙警察と宇宙軍では、同じ海賊を相手ににしても仕事の仕方が違う。宇宙警察は、結果、犯人を殺害することになろうとも、最初は逮捕しようと努力する。

しかし、宇宙軍はそんなまどろっこしいまねはせずに初めから撃破を目的とする。海賊船ごと破壊しようと、遠慮なく兵器を使用するのだ。装備もまるで違う。

それは戦闘というよりは、一方的な虐殺といえたかもしれない。だが、海賊などという輩に同情するほど、宇宙軍は人道主義者の集まりではなかった。海賊「毒の牙」の船団は、文字どおり一方的に蹂躪されていた。

アリーにすれば、宇宙軍に宇宙海賊ノクターンも壊滅してもらえれば言うことなかったのだが、マリーンは、シャロンなどとは違い、百戦錬磨の古狐であり、「毒の牙」が宇宙軍を引き受けてくれるのを、囨としてまんまと逃げおさせた。

※

「ちきしょう、毒婦め、はめやがったな」

宇宙海賊「毒の牙」の頭ヤコブは、人工改造衛星ネガポジの一室で、舌打ちをした。ここここにいたれば、マリーンの罠にはまったことは、さすがに承知していたが、だからといって有効な対策の立てられるようなものではない。しかし、彼は切り札を持っていた。「やむをえん。奴を使う。あの化け物を宇宙に放擲しろっ」

頭目の決断に、部下たちは色めきたった。

ヤコブは、金銭、美女、名譽、権力、腕っ節、そういったありふれたものに執着していたし、それらを愛している徹底的な俗物である。そんな彼は、決して部下に人望のあるタイプではなかったが、強欲ではあっても、ケチではなかったし、自分の歡びを部下に分けてやることを惜しみはしなかったもので、海賊業界の成功者として、それなりの敬意を払われ、部下たちにも憧れられていた。

衛星ネガポジから、宇宙空間に出現した謎の生物の触手は、物理法則を無視して増幅増大増量されていった。無から有は生じない。しかるに、このわけのわからない物体は、無限に増殖しているようだった。

この謎の生物というか、物体に対しても、宇宙軍は無力だったわけではない。主砲の正射を浴びせれば、焼き払い分断することに成功した。ところが、分断されたはずの触手が別の触手によって吸収されて、また元通りになってしまう。もちろん、別の場所に癒着し

ただのだから、元通りというのとは厳密には違うが、見た目ではたいした違いではない。

生物の常識を超えた治癒能力というか、復元力を目撃した宇宙軍の面々は悪い夢でも見ている気分だった。

アリーがネガポジ内で体験した悪夢を、宇宙空間で規模を数百倍にして体験しているのである。

この宙域に乱入してきた宇宙軍は、戦力としてはちょっとしたものだだったが、なにせ各部隊から参加したい奴が好き勝手に参加しているだけの烏合の衆である。全軍を統括している者がいない。よって守勢に回ると弱い。どう動いていいのかわからないのだ。

近づくに近づけず、衛星ネガポジを遠巻きにして、無秩序に伸びてくる触手を、各個に対応するのが手いっぱいである。

一方、「毒の牙」にしても、起死回生となりえなかったのは誤算だった。このままでは埒があかない。勝てないまでも宇宙軍には撤退してもらわねばならない。

「宇宙軍の奴め……んっ？　そういえば、あの女」

ヤコブの脳裏で、宇宙軍と、圧倒的な強さを誇った赤い女戦士が結びついたとき、「紅の戦乙女」という言葉が浮き上がった。

※

「あぁー、あぁー、聞こえるかね？」

「……」

喘ぐ女たちの見本市のような第六通路に、ヤコブの紳士ぶった声が流れた。

しかし、口まで謎の生物で蓋をされ、喉奥まで犯されてしまっているアリーに応答できるわけがない。紺碧色の瞳が左右に動いたことで、声が届いていることがわかった。

「なるほど、それでは返事ができないな。少し待ちたまえ」

ヤコブがなにやら部下に指示をすると、アリーの口唇を塞いでいた生物が外された。

「やあ、初めましてと言うべきかな。アリー・ムーンヒルくん。先日のパーティーのときに会ったがね」

「……げえ、げえ」

口内から喉、そして胃袋まで犯していた粘液を嘔吐している女探偵に、ヤコブの嘲笑混じりの声がかかる。

「外の宇宙軍は、キミの企みなのだろう？」

「ふっ、そういうあなたはヤコブね。わたしに声をかけてきたってことは、そろそろ尻に火がついたってことかしら」

「まあ、それほどでもないさ。ただ宇宙軍には早々にお引き取り願いたいというのは本音だな。そこでキミから彼らにすぐに手を引くように命じてもらいたい。おっと断るなどという返事は聞くつもりはないよ。そうしないと、キミの無様な排泄シーンを、生中継で宇

宙軍の奴らに放映するよ。そんなことになったら、宙軍におけるキミの偶像が破壊されるのではないかな」

(なんですって！)

その宣言と同時に、肛門に侵入していた触手の質量が、どんどん増してきたのだ。

「あああああ」

初めて経験する異様な感覚に、喉の奥から小さな悲鳴のような声を漏らす。

ダスティによってアナルを拡張されてしまったアリーだが、この触手のやろうとしていることは、単にアナルセックスというわけではないようだった。つぎつぎと入り、大腸まで犯してくる。これはもは浣腸といったほうがふさわしい。

「宙軍の『紅の戦乙女』と宙警察の雪女、どちらが我慢強いか、楽しませていただく」

この謎の生物による浣腸が行われたのはアリーに対してだけでなく、シャロン、そして婦警たち全員にも行われていた。

「ああ、裂ける、お腹が裂けちゃう……！」

悲痛な声を漏らしたアリーの、引き締まっていた腹部が、まるで臨月間近の妊婦のように膨らんでしまった。

肛門から侵入した粘液が、喉からあふれるのではないかと思えるほどに、いっぱい

ばいに詰め込まれてから、女たちは解放された。

しかし、彼女たちは逃げる素振りも見せず、思い思いの姿で、耐えるのが精一杯である。アリーにせよ、シャロンにせよ、そして婦警たちにせよ、立派に自立した女性たちである。相応の自意識とプライドを持っており、人前で排便できるような性分ではないのだ。

「も、もうダメ、出ちゃう……」

婦警のひとりが苦悶の声で叫ぶ。

「おおっと、そうだった。婦警のみなさんは、すでにこの体験がお済みでしたな？ みんないっしょでないと絵的につまらないだろう。アリーくんが排出するまで漏らさないように手配しよう」

ヤコブの指示が出てしばらくすると、婦警の肛門付近で、謎の生物は固体化した。

「アッ、アッ」

婦警たちはいっせいに苦しげに叫び出した。

顔色は真っ青になり、ダラダラと脂汗を吹きこぼし、喉奥から絶望的な苦鳴を絞り出している。

お尻の穴を指で押さえたアリーは、千鳥足でふらふらと歩き始めた。そうすることによって、少しでも気を紛らわそうとしているかのよう。

いわゆる普通の流腸液よりもタチが悪い。なにせこの液体は、生物であり、腸管のなか

で暴れているのだ。

妊婦のように膨らんだ腹が異様な動きをする。まるで胎児が、母親の腹を蹴っているようだ、とたとえれば可愛らしいが、むろん、そんな生易しいものではない。

アリーとてもちろん、一刻も早く排泄しなかったが、それを映像に撮られて、外の宇宙軍に流されるという現実には耐えられなかった。

ことがここにいたって以上、たとえ、アリーの無様な排便シーンを見ようとも、宇宙軍が退却するとは思えない。ただ、「紅の戦乙女」の名声が地に落ちるだけだろう。

だから、ヤコブは、なにがなんでもアリーの口から宇宙軍に撤退の要請をさせたいのだ。女探偵は驚異的な精神力で排泄の生理的欲求と闘ったが、我慢したからといって状況が好転するものではない。

紺碧の瞳が虚ろになり、焦点が合わない。それどころか視界がぐるぐる回り出した。アリーは、壁に片手をつけて、ハアハアと大きく呼吸をする。感動的なほどに長い美脚がプルプルと震えた。下腹部を刺すような痛みが走り、キュルルと情けない音がしだしていった。

「あまり無理をしないほうがいいぞ。無理をしすぎると腸管が破裂して死ぬからな」  
ヤコブの嘲笑が聞こえる。

まるで雪山で遭難したかのように蒼白になった顔、血の気を失った唇、全身からは脂汗



が滲み、失神しそうな苦しみが襲う。指の狭間からタラタラと液体がこぼれ出す。

「アリー、いくら、我慢しても、ダメなのよ。わたしも、みんなも頑張ったんだけど……だから、無駄な抵抗はやめて、みんなで楽になりましょう」

「ふ、ふざけないでッ、……くっうう……」

シャロンによる婦警たちの気持ち代弁した説得にも、アリーは気丈な言葉を吐き捨て、首を横に振った。

しかし、声を出したことによって、張り詰めていた神経を少しだけ弛緩させてしまったらしい。

下腹がゴロゴロと鳴り、次の瞬間、肛門が活火山のように隆起したかと思うと、ブバババババという凄まじい破裂音とともに、液体が噴出し始めた。

「ヒイヒイヒイッ、やだ、漏れちゃう、止まらない、止まらないのおおおお」

絶望の悲鳴を漏らしたアリーだったが、一瞬の気の緩みで始まった排便を、もはや止めることができなかった。

「よし、ほかの女たちも出させてやれ」

ヤコブの指示が飛び、婦警たちのアナリストッパーと化していた生物が軟化した。

次の瞬間、シャロンの肛門をはじめ、その場にいた婦警たちの肛門からいっせいに、ババババババハッという激しい音がして、液体が噴き出した。

我慢に我慢を重ねたあとに一気に垂れ流す解放感に、女たちは頭のなかが真っ白になり、なにも考えられなくなってしまう。

十分以上にわたって、穴があつたら入りたいような恥ずかしすぎる音を、ブリ、ブシュッ、ブルルッと大音響で聞かされるのは、大変な屈辱である。その光景をヤコブをはじめとした多くの男たちに見られていると思うと、恐ろしいまでの羞恥だった。

アリーは便秘に苦しむような不健康な女とは違い、いたって快便なタチである。しかし、こんなに大量のモノを出した経験はない。噴出したのは謎の生物だけではなく、大腸のなかの宿便もこそがれてきた。

「ふうー……、ヒイツ」

壁にしがみついたまま、膝が崩れたアリーは、すべてを出し終えた安堵の溜息を漏らす。が、ちよつと時間がたつと、再び便意が高まり、噴出する。その繰り返しである。

浣腸による強制排便は、女の体力と気力を確実に削り取る。いったんは収まったと思つても、思い出したように噴出する女たちの尻の穴は、まるで壊れた蛇口のような有様である。

「どうやら、特製の浣腸でイってしまったようだな」

ヤコブの声だけでなく、ヤコブの側近たちの嘲笑まで聞こえてきて、ぐったりと身を横たえたアリーは悔しげに頬を歪めた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**